

蝶の姿になってしまったことに大きな悲しみがこみ上げてきました。この世界に陥ってから、ケンの心に芽生えていた元の世界へ戻りたいという願いも相俟ってか、ついに今まで保っていた心のバランスは脆くも崩れてしまいました。

そうすると、ケンの目には、さきほどまで美しい輝きを持って羽ばたいていた蝶も醜い羽虫としか映りません。

泣き崩れそうになる思いをすんでのところでこらえ、マヤのそばに辿りつく、マヤの心も同じように帰りたい思いでいっぱいであることがわかりました。

ケンとマヤにむかって、エルムは問いかけました。



「君たち、もとの世界へ帰りたいのかい？」

「はい。もちろん！」とすぐさまケンとマヤは声をそろえて答えます。

するとエルムは蔑みを含んだ笑みを浮かべ、冷たい声で言いました。

「帰る方法はひとつだけある。それは...さっき秘密にしていた願いをきいてくれるのなら、元の世界に帰してあげよう。その願いとは、この蝶の世界の存続のためには、人間の心臓と血液が必要です。二人のうちどちらのものでもいいので、差し出してください。」

その言葉を聞くやいなや、迷う間もなくケンはマヤの首筋に飛び掛り、噛み切ろうとしました。事態を飲み込めず、ただバタバタともがくだけのマヤ。

血ばった目をしたケンの顔と対照的に、失望が絶望へと変わったマヤの透き通るような青い顔。